

〔小笠原諸島自生種による植生回復技術の開発〕

苗木生産技術の開発

～ノヤシの幼木期の施肥量の解明～

宗 芳光

(小笠原農セ)

【要 約】ノヤシの生育状況および使用した肥料の価格から評価すると180日タイプの被覆燐硝安加里(N-P₂O₅-K₂O=14-12-14)を用いた場合には、6g/L/年が適切な施肥量である。葉長点高の生長は試験開始から1年間で2倍以上の175cmとなる。

【目 的】

ノヤシはかつて小笠原諸島全域で群落を形成し、森林を構成するヤシ科の唯一の固有種であるが、現在は絶滅危惧種となっている。その希少性や樹形などから、公園や街路樹など公共工食用樹としての要望があるため、効率的に生育する技術を確立する。

【方 法】

父島字奥村で採種し、2009年に発芽したノヤシの3年生実生苗を用いた。2011年1月31日に9号鉢(6.4L)に鉢上げし、鉄骨ハウスで育苗し、試験を開始した。用土は赤色土を用いた。肥料は180日タイプの被覆燐硝安加里(N-P₂O₅-K₂O=14-12-14)を用いて2011年1月、6月、2012年2月、7月に施用した。試験区は0、3、6、9、12g/Lとし、各区6株とした。灌水頻度は夏期に3回/週、それ以外は2回/週とした。調査項目はヤシ類の出荷基準を参考にして生長点高、葉長点高および玉直径とした(図1)。

【成果の概要】

1. 玉直径：0g/L区では栽培半年目から生長が横ばいとなり、試験開始時の2.4cmから2013年1月時点では3.5cmとなった(図2)。3、6、9、12g/L区の生長は試験開始時の2.4～2.6cmから2013年1月時点では7.9～8.6cmとなった。
2. 生長点高：栽培1年目の6月頃から伸長し、12月頃から鈍化した。2年目の生長は1年目よりも低下した。0g/L区では試験開始時の24cmから2013年1月時点では25cmとなった(図3)。3、6、9、12g/L区の生長は試験開始時の25～26cmから2013年1月時点では70～76cmとなった。
3. 葉長点高：生長点高と同様の生長を示した(図4)。栽培1年目の6月頃から生長が高くなり、12月頃から鈍化した。2年目の生長は1年目よりも低下した。0g/L区では試験開始時から生長せず、2013年1月時点でも73cmであった(図3)。3、6、9、12g/L区の生長は試験開始時の74～78cmから2013年1月時点では214～224cmとなった。
4. まとめ：玉直径および葉長点高の生長は3、6、9、12g/L区でともに高いが、生長点高が3g/L区で低いこと、肥料代を考慮すると幼木の適切な施肥量は6g/Lである。また、栽培2年目の生長点および葉長点の生長が1年目よりも低い要因は鉢上げしなかったことが考えられる。このことから、この鉢サイズでの育苗期間は1年が適切であると考えられる。
5. 留意点：2012年5～7月にカイガラムシ類によるすす病が発生した。また、2012年10～12月にカンザワハダニが発生し、葉の一部が褐変した。

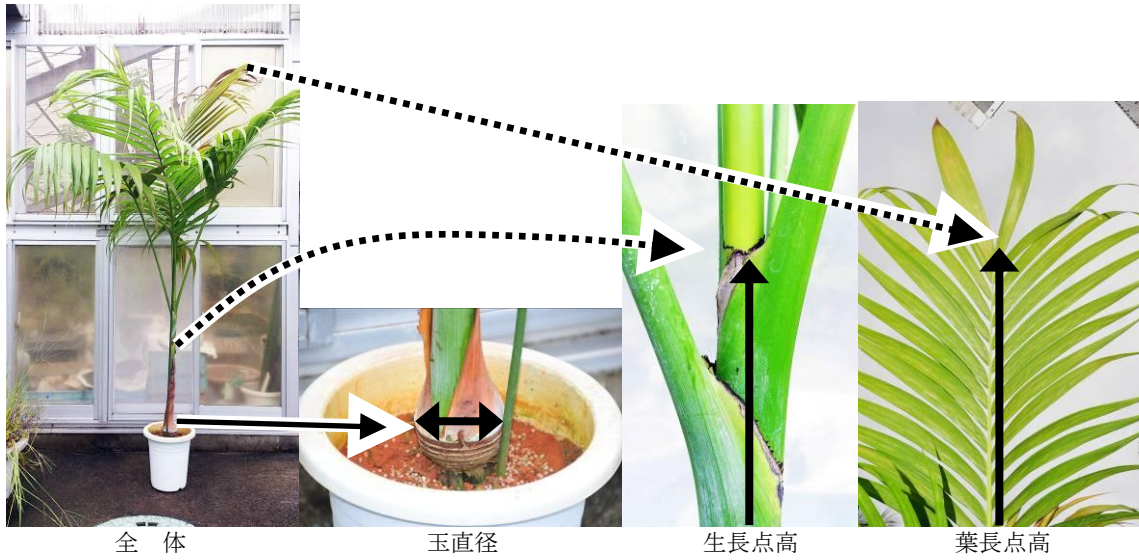


図1 ノヤシの測定部位

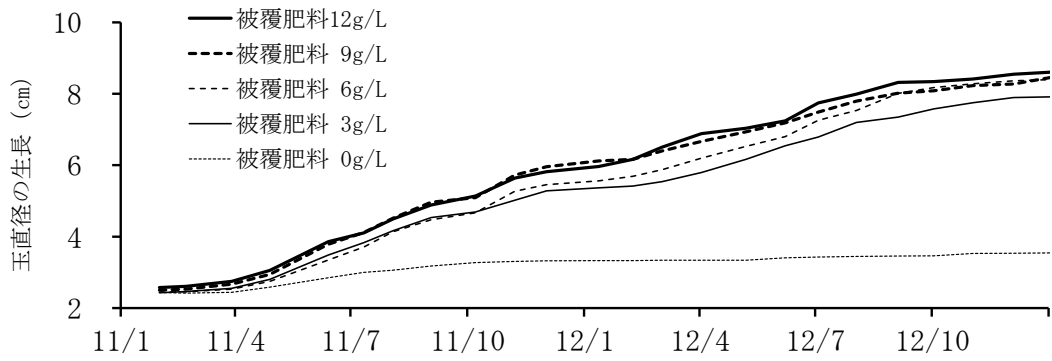


図2 赤色土で鉢栽培したノヤシの玉直径の生長

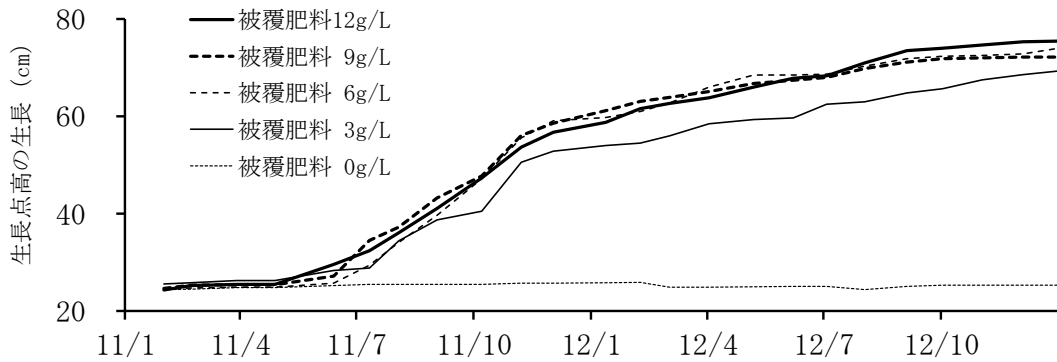


図3 赤色土で鉢栽培したノヤシの生長点高の生長

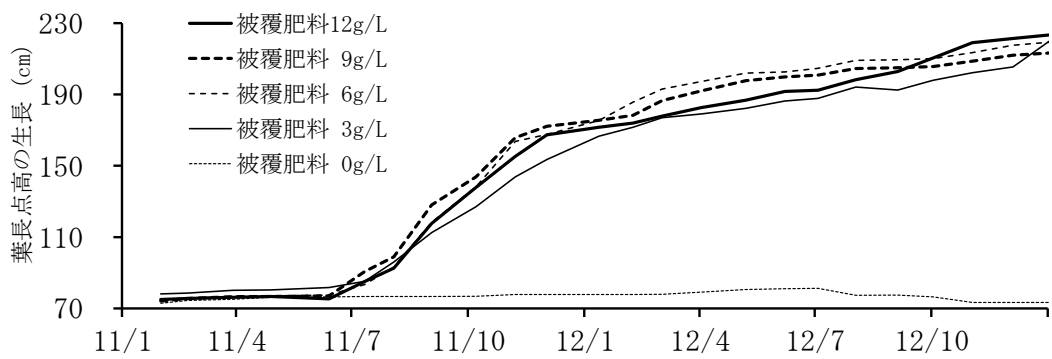


図4 赤色土で鉢栽培したノヤシの葉長点高の生長